２０１９年度 野球規則改正

公認野球規則「はしがき」より

さて、今年度の規則改正であるが、文言の変更、追加、削除がほとんどである。新規追加は5.10（m）項「（１試合あたりの）マウンドに行く回数の制限」についてただ１つである。しかし、この条文には「【注】我が国では、所属する団体の規定に従う。」という文言が加わる。改めて所属団体の規定の再確認をお願いしたい。

また、規則の大幅な条文構成の変更に伴い、2016年から昨年まで記載されていた、2015年規則書条文番号の表示と、巻末の条文対比表は、今年削除することにした。ご理解をいただきたい。

この規則書は2019年2月15日から発効する。　　日本野球規則委員会

野球規則改正の抜粋

5.09（c）　アピールプレイ

次の場合、アピールがあれば、走者はアウトとなる。

（1）　飛球が捕らえられた後、走者が再度の触塁（リタッチ）を果たす前に、身体あるいはその塁に触球された場合。

【原注】　ここでいう〝リタッチ〟とは、捕球後、塁に触れた状態から次塁へスタートすることをいう。

したがって、塁の後方からスタートして、走りながら塁に触れて次塁へ進もうとするいわゆるフライングスタートは、正規なリタッチの方法ではない。《このような走者は、アピールがあればアウトとなる。》

5.10(ℓ) 監督またはコーチがマウンドへ行く制限について

○下の競技者必携改訂を参照ください。

（全日本軟式野球連盟）競技者必携改訂の抜粋（追加されたもののみ）

規則適用上の解釈

(29) 監督またはコーチがマウンドへ行く制限について（5.10ℓ）

監督またはコーチがマウンドへ行く回数のカウントの仕方について、アマチュア規則委員会より、2015年2月、MLBおよび国際大会の基準として提示された下記１～４を、全日本軟式野球連盟でも採用する。

1　監督またはコーチがファウルラインを越えて投手のもと（マウンド）へ行った場合は必ず1回に数える。（ただし投手交代の場合を除く）

2　イニングの途中で監督またはコーチが投手のもとへ行き投手交代をする場合：新しい投手がマウンドに到着し、その投手がウオームアップ（準備投球）を始めたならば、その監督またはコーチはベンチに戻らねばならない。もし、そのままとどまっていた場合には１回と数える。

3　新しいイニングの初めに、監督またはコーチがマウンドに行った場合：１回に数える。

4　球審（審判員）は、監督またはコーチに投手のもと（マウンド）へ行った回数を知らせる。

(33)　試合に出ているプレーヤーの代走が認められる場合（臨時代走者）

審判員はスピード化を図るため、プレーヤーが負傷などで治療が長引く場合は、相手チームに伝え、試合に出ている９人の中から代走（打順の前位の者、ただし投手および捕手を除く）を認めて試合を進行する。

臨時代走の役割は、アウトとなるか、得点するか、またはイニングが終了するまで継続する。（規則5.10e【原注】関連）

（競技者必携改訂抜粋の続き）

国体等 競技運営に関する注意事項

14　打者が頭部にヒット・バイ・ピッチを受けたときには、球審は攻撃側監督と協議し臨時代走の処置を行うことができる。塁上の走者が負傷した場合で、一時走者を代えないと試合の中断が長引くと審判員が判断したときは、臨時代走の処置を行うことができる。

国体等 競技に関する連盟特別規則

３タイブレーク方式

継続打順で、前回の最終打者を一塁走者、その前の打者を二塁の走者とする。すなわち、0アウト一・二塁の状態にして１イニングを行い、得点の多いチームを勝ちとする。勝敗が決しない場合は、更に継続打順でこれを繰り返す。なお、通常の延長戦と同様規則によって認められる選手の交代は許される。

審判上の取り決め事項ならびに注意すべき規則

1,　宣告の取り決め

3　投球が打者に触れたがヒット・バイ・ピッチとしない場合、両手を上げてボールデッドであることを示し、「**ボール**」または「ストライク」と宣告する。

4　スクイズプレイまたは本盗の場合、投手の投球を捕手が本塁上に出るか、あるいはバットまたは打者に触れてボークと打撃妨害の規則が適用される場合は、「タイム」を宣告後、「打撃妨害」を宣告して三塁走者の進塁（得点）を認め、続いて打者を一塁に進める。他の走者も**「ボーク」**によって１個の進塁を認める。

8, ハーフスイングの際の、チェックスイングの要請

ハーフスイングの際、球審が下した投球判定には抗議はできないが、**「ボール」**と宣告したときだけ、監督または捕手は、振ったか否かについて塁審にアドバイスを受けるよう、球審に要請することができる。

なお、バントはスイングではないから、チェックスイングについての要請は受けられない。ただし、捕手の陰で打者の行為が判然としないようなときは、球審は独自の判断で塁審にアドバイスを求めることができる。

15, 正しい投球姿勢の徹底（5.07 a（1）、（2））

3　投手が投球する際に１度離れた両手を再び合わせたり、投げ手でグラブをたたいたりすれば「ボーク」が宣告される。

16, ホームスチールとピッチドボール（投球）の判定

決してあわててはいけない。まず投球の判定を宣告し、次に本塁でのプレイを、「アウト」か「セーフ」のジェスチャー、コールで示す。それから、改めて記録員に、今の投球は「**ボール**」か「ストライク」であったかを通告する。